
荻窪ブルース

鈴木真心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

荻窪ブルース

【Nコード】

N8709Q

【作者名】

鈴木真心

【あらすじ】

東京は荻窪で暮らす先輩と後輩深雪のだらつとした奇妙で普通な同居生活。

ある日、洗濯機の中に腕が一本落ちていた。

「珍しいこともあるもんだ」

くわえ煙草でそう言ったあたしに、遊びに来ていた後輩の深雪が「何かありましたか」と顔を覗かせた。

「前に蛙が干からびてたことはあったんだけど」

「蛙ですか」

「うん蛙」

荻窪にも蛙がいるもんなのかと、そのときは感心したものだが。

「で、今回は何がいたんですか？」

「腕が」

「はい？」

「腕があつた」

「まつさかー」とけらけら笑う深雪に、「だよねー」と笑って、一回、洗濯機をばたんと閉めた。また開けた。

「やっぱりあるんだけど」

「蛙が？」

「いや、腕が」

どうしたもんか、これはまいった。

誰の腕かは知らないが、取り敢えず、あたしんちの洗濯機の中にあるのは困る。

やはり、都会とは物騒なんだろうか。

「ねー深雪」

「何ですか」

「腕って生ゴミであってる？」

「粗大ゴミじゃないことは確かですけど」

「肘下なら粗大じゃないよね」

「そうですねー」と相槌を打った深雪が、ビールを取りに冷蔵庫を開けた。

「先輩」

「ん？」

「粗大かも」

くわえ煙草で顔だけを部屋に戻したなら、冷蔵庫から顔を出した深雪と目が合う。

「ビールじゃなくて、肘上が冷やされてます」

「やだ、肩下ってこと？」

「はい」

昨日の昼間に冷やしておいた筈のビールは、一体どこへ行ったのか。

「じゃあ粗大かなあ」

「分割されてるから、やっぱり生ゴミでいいんじゃないですかね」

「あんたが粗大かもって」

「やっぱり生ゴミですよ」

ビニール袋にそれを詰め込む深雪に、「あ、これも」と洗濯機の中の腕も渡した。

何となく考えていたことを深雪に聞いてみた。

「二十五過ぎると妖精になれるんだって」

「何の話ですか」

「処女の話」

「処女なんですか」と聞かれて「違うけど」と答えた。

処女じゃないけどセカンドに突入してだいぶ経つ。

妖精にはなれなくても、穴は塞がるんじゃないだろうか。

いや、処女膜が再生しないことくらい、あたしだって知ってるけども。

「ちなみに男だと何になれるんですか」

「魔法使いだって」

「魔法使いの方が格上じゃないですか」

確かに、妖精は魔法使いが連れてるイメージがある。

あんまり、魔法使いが妖精に連れられているイメージはないかもしれない。

こんなところでまさかの男女差別だろうか。

いや、格差？

これが男女の格差なのか。

「根本から正していかないかね、やっぱりなくならないものかね」

「何の話ですか」

「格差の話」

「魔法使いの話だったんじゃないんですか」

「まあね」と答えてから、煙草に火を点けた。
ああ美味しい、煙草が美味しい、人生は最高だ。

「いやはや、素晴らしい」

「魔法使いが？」

「いや、人生が」

「妖精の話はどうしたんですか」

深雪もまた煙草に火を点けたところで、妖精になった自分を考えてみた。

「気持ち悪い」

「まあ、気持ち悪いですよね」

メルヘンは似合わない。

ファンタジーも似合わない。

人生は素晴らしい、が、人生とは現実だ。

「これ、どうすんの」

「見ないで返却も癪ですけどね」

レジで誤って誰かのものを入れ替わったらしいレンタルDVDに、溜め息が出て煙が揺れた。

「『Dカップハイスクール』って」

「『にゃんにゃん言わせて』って」

「まんまじゃねえかよ」

登場する方々について、ある意味誰かの妖精なんだろうとか、そ

んなことを考えてから。

あたしはやっぱり、妖精より魔法使いの方がいいよと言ってみた。

「穴が塞がらない魔法とか使えるんですかね」

「カビが生えない魔法とかね」

さて、このDVDをどうしようか。

アパートでぐだぐだしていれば、呼び鈴さえ鳴らさずに深雪が入ってきた。

「ただいまです」

「何あんた、ここに住んでんの」

「そんなもんですね」

手にはしっかりと合鍵が握られていた。

いつ作ったんだとか、もう面倒でどうでもいい。

「さ、芋育てますよ先輩」

「芋？」

「家庭菜園キット買ってきたんです」

よいしょつとあたしの目の前にそれを置いて、やる気満々に腕まくりをした深雪を見上げた。

芋だろつがトマトだろつがどっちだっついていいけども。

「うちで育てんの？」

「他にどこで育てんですか？」

「あんたんちでやれば」

「うち引き払ってだいぶ経ちますよ」

「あ、そうなの」

ずいぶんとうちに居座るなと思ってたけど、何だ、もう住み込んでたのか。

「て、おかしくね？」

「まあまあ」

「もしかして体狙い？」

「先輩がDカップだったらそうかもしれないですけどね」

失礼な。

「Aだって需要あるよ」

「あるんですか」

「ないこたあないって程度？」

「聞かないでくださいよ」

あたしにもわからん、と言ったなら、人間体じゃないです顔ですと、
実も蓋もない答えが返ってきた。

どっちもどっちなあたしは、じゃあ、何で勝負に出たらいいんだろう
うか。

「だから家庭菜園ですよ」

そうなのか。

「ベランダ遊ばせてるのはもったいないですよ」

「で、芋？」

「秋ですから」

「メロンがいい」

「それ夏ですから」

そうは言っけども。

「今から育てんだよね？」

「はい」

何か？みたいに首を傾げた深雪は、どうやらおつむが足りないを見た。

「今から育てたって今秋中には食べないじゃん」

「あ、」

『いーしゃーきいもつ、焼き芋ー』

沈黙の中、お馴染みのメロディがアパート下を通った。

「……買いに行きませんか？」

「屁こかないですよ」

「先輩こそ」

家庭菜園キットは、間違いなくお蔵入りだと思った。

今日も荻窪は晴れていた。

「味噌食べたくなる空じゃないですか？」

「青いのに？」

「青は味噌ですよ」

そもそもが味噌食べたくなる空つてのがよくわからないが、深雪は味噌を食べたいらしい。

てか、味噌食べたいって何だ。

窓から覗く空は青い。

そして、冷蔵庫をがさがさと漁った深雪を視界の端に捉えていれば「じゃーん、味噌です」とか言って、本当に味噌達が登場を果たした。

「味噌『達』ね」

「味噌です」

「複数系でしょ、てか何で味噌がそんなに」

いつの間にか同居人と化していた深雪は、いつの間にか冷蔵庫を掌握していた。

そして、いつの間にか味噌コレクションをしていたらしい。

「で、何作ってくれんの」

「食べ比べじゃだめですか」

「味噌の？」

「味噌の」

何で味噌だけなのと聞いたら、味噌って高いんですよと当然に返される。

つまり、

「味噌に食費をはたいたわけね」

「だって味噌ですよ」

「そりゃ味噌だけでも」

調味料として活躍してこそその味噌だとは思うが、しかし、空の青に立ち向かわんばかりのそれらは、深雪の前で堂々として見えた。

たかが味噌なのに。

しかしながら、これだけの味噌ならば、深雪がその頭上に掲げる味噌より内容は濃いことだろう。

「人生って深いね」

「何の話ですか」

「味噌の話」

「ニュアンスが……」

「味噌の話だよ」

言い切る。

「腹減ってきたじゃんか」

「味噌がありますって」

あんたにもあればよかったのに。

そうは言わずに食べた白味噌は、思ったよりも濃厚だった。

「甘く見てた」

「意外と濃厚じゃないですか？」

「あんたと違う」

「だから、何の……」

「味噌の話だよ」

絶対違うと首を捻る深雪と味噌を見比べて、食べた白味噌は、何と驚きの八百九十円だった。

「高い！」

「白味噌バカに出来ないのでから」

「あんたと違う」

「だから何が……」

さて、明日からの飯をどうしようか。

5 (前書き)

おげひん注意。

「食事に誘われた」

「快拳ですね」

「……もっと何かさあ、盛り上がってみてよ」

「快拳としか言えません」

一応うだうだと続けている会社の後輩に、何とまあ、今度食事に誘われた。

うきうきはしない。

何故なら、あたしは年上好きだ。

「が、しかしだ」

ぐ、と握り拳のあたしの横で、深雪はどうでもよさそうに耳掻きをしていた。

本当にどうでもいいらしい。

「三年ぶりのときめき珍事なわけ！もうこれは、食っちゃうしかないわけ！」

「いきなりジャンプですねー」

「ホップもステップも踏んでらんない」

順番なんぞ気にしていたら、永遠にステップ止まりな気がする。永遠にステップって、どんなテンションだ。

「でも、見切り発車はよくないですよ」

「遅いよりよくない？」

「何の話ですか」

「発射の」

「発車の？」

「致してる最中の方……あ、終わりかな？」

言つてて空しくなったのは勘違いであつて欲しい。

発射とかフィニッシュとか、どんだけ飢えてんだつて話だ。

「あたしは飢えてない」

「覆しましたね」

「飢えてるっちゃ飢えてるけど」

「どっちですか」

耳搔きを終えた深雪が、冷蔵庫をがさがさと漁り出した。

「味噌しかないですねー」

「ないよ」

「お腹空きました」

「だから飢えてるつて言つたじゃん」と言えば、「ああ……」と遠い目で答えられた。

「後輩に米貰つてきてください」

「その手があつたね」

「使えるもん使わないと飢えが満たされません」

「味噌お握りが作れるね」

性欲より食欲。

男じゃ満たされないと悟つた、荻窪アパート一室のあたし達だった。

後日、飢えが限界の深雪も連れて後輩との食事に行けば、ジャンプしたのは深雪の方だった。

「見切り発射でした」

「あんたもね」

あな恐ろしきは美貌の彼女。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8709q/>

荻窪ブルース

2011年4月3日14時45分発行